「蜻蛉」巻の小見出し（108 項目）

現在、『源氏物語』の各巻々の翻字本文と校訂本文の整理をしています。
校訂本文は、大島本（古代学協会蔵）ではなく、池田本（天理図書館蔵）で試案を作成中です。
すでに公開しているのは、『池田本『源氏物語』校訂本文「桐壺」（第一版）』（ＮＰＯ法人〈源氏物語電子資料館〉編、伊藤鉄也・須藤圭　責任編集、平成 29 年 1 月 31 日）です。今後とも継続して発行していきます。

諸伝本との違いや、現代語訳や外国語訳本との違いなどを、この詳細な小見出しを単位として比較して見ていくと、それぞれの違う箇所がわかりやすく、通覧しやすくなるという利点があります。
その他にも活用できそうなので、引き続き掲載します。

さて、池田本の校訂本文で使用するための小見出しの「蜻蛉」巻ができあがりました。
これは、関口祐未さん（元国文学研究資料館・科研運用補助員）の労作です。

「桐壺」「帚木」「若紫」巻と同じように、１つの小見出しが３０文字でできています。
これまでの方針通り、物語本文を細かく分けることで、全１０８項目となっています。

この小見出し一覧には、以下の特徴があります。

１　３０字の簡潔な小見出し
２　校訂本文１５０字位（２５０字以下）に一つの小見出し
３　小見出しの次に、「校訂本文（最初の数文字）」＋（参照資料情報）を付加

４　参照資料情報は、次の３種類を「／」で区切って明示
・『源氏物語別本集成 続 第十五巻』（伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美編、2002 年、おうふう）の文節番号
・『源氏物語大成　普及版　第六冊　校異編』（池田亀鑑編、1985 年、中央公論社）の頁行数
・『新編日本古典文学全集（25）源氏物語（６）』（阿部・秋山・今井・鈴木編、1998 年、小学館）の頁数

５　『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「蜻蛉」』所収小見出し（35 項目）は、該当する箇所にだけ挿入

『源氏物語』蜻蛉・小見出し（108 項目）

■１　宇治では、浮舟の姿が見えないことに女房達が大騒ぎして探し回る
「かしこには～」　　（0001／一九三一①／二〇一）
［１］浮舟の失踪に大騒動となり右近と侍従は浮舟が入水した思う

■２　乳母らが慌てふためく中、右近と侍従は浮舟が身投げしたかと思う
「京より～」　　（0013／一九三一②／二〇一）

■３　京の母君から届いた手紙を開くと、浮舟を気にかけて心配する文面
「泣く泣く～」　　（0055／一九三一⑦／二〇一）

■４　右近は浮舟が書き残した母君への返事を読み、地団駄を踏んで泣く
「昨夜の御返りをも～」　　（0093／一九三一⑪／二〇二）

■５　右近は浮舟が身投げするとは考えられず、乳母は驚き慌てるばかり
「いみじく思したる～」　　（0144／一九三二①／二〇二）

■６　匂宮は普段とは異なる浮舟からの返事に驚き、宇治に使者を寄こす
「宮にも～」　　（0174／一九三二⑤／二〇三）
［２］浮舟を心配して匂宮が文を遣わし従者は浮舟の死を伝える

■７　匂宮の使者は下仕えの女から浮舟が昨夜急死したことを聞き、帰京
「あるかぎり～」　　（0193／一九三二⑧／二〇三）

■８　匂宮は浮舟急死の報に驚き、宇治に時方を遣わして事情を探らせる
「かくなんと～」　　（0232／一九三二⑪／二〇三）

■９　宇治の邸では人々がたち騒ぎ、時方は右近に会えず侍従と対面する
「かやすき人は～」　　（0321／一九三三⑧／二〇四）
［３］時方は匂宮の命により宇治で侍従と会い浮舟の急死を知る

■10　侍従は後日落ち着いてから詳しい事情を話す、と言って激しく泣く
「いとあさましく～」　　（0376／一九三三⑭／二〇五）

■11　邸の人々はただ泣くばかり、亡骸さえないと嘆く乳母らしき人の声
「内にも～」　　（0425／一九三四⑤／二〇五）
［４］乳母の嘆きを不審に思う時方は侍従を責めるも要領を得ない

■12　聞こえてくる言葉に合点のゆかぬ時方、侍従に事実を話すよう促す
「心得ぬことども～」　　（0493／一九三四⑬／二〇六）

■13　侍従は浮舟が自ら命を絶ったことを、時方にそれとなく打ち明ける
「げにいとあはれなる～」　　（0550／一九三五⑥／二〇七）

■14　侍従は帰る時方に、浮舟と匂宮の関係を他へ漏らさぬよう念を押す
「心得がたく思ひて～」　　（0627／一九三六①／二〇七）

■15　宇治に母君が到着、事情を知らず浮舟が突然消えたことに動揺する
「雨いみじかりつる～」　　（0682／一九三六⑥／二〇八）
［５］母君が大騒ぎをするも右近と侍従は入水を伝え葬送の車を出す

■16　母君は、浮舟と薫の結婚を面白く思わない下人などの仕業かと疑う
「さては、かの～」　　（0726／一九三六⑫／二〇九）

■17　侍従は右近と相談して、浮舟と匂宮のこれまでの関係を母君に話す
「侍従などこそ～」　（0780／一九三七④／二〇九）

■18　母君は気も動転し、せめて亡骸だけでも探し出して弔いたいと願う
「言ふ人も消え入り～」　（0876／一九三八①／二一一）

■19　右近と侍従は亡骸のない葬送の車を仕立て、近親者だけで送り出す
「この人々二人して～」　（0927／一九三八⑧／二一一）

■20　右近と侍従は車を山裾へやり、事情を知る法師達だけで火葬させる
「大夫、内舎人など～」　（0966／一九三八⑫／二一二）
［６］反対をおしての偽装による火葬、右近と侍従は真相を隠す手だてを尽くす

■21　火葬があっけなく終わったことに、里の人々はあれこれ噂を立てる
「田舎人どもは～」　（1011／一九三九③／二一二）

■22　浮舟の噂が薫の耳に入ることを恐れ、右近と侍従は真相をひた隠す
「かかる人どもの～」　（1038／一九三九⑦／二一三）

■23　薫は石山寺に籠もり女三の宮の病気平癒を祈祷中、浮舟の死を知る
「大将殿は～」　（1134／一九四〇④／二一四）
［７］薫は母女三宮の病気のため石山寺に参籠中に浮舟の葬送を聞く

■24　薫は宇治へ大蔵大輔を遣わし、葬儀を急いで済ませたことを責める
「いみじきことは～」　（1176／一九四〇⑨／二一四）

■25　大輔の報告に、薫は浮舟を宇治に住まわせていたことを悔やみ帰京
「殿は、なほ～」　（1238／一九四一②／二一五）

■26　薫は浮舟との儚い仲を悔やみ、思い通りにならない己の宿命を歎く
「宮の御方にも～」　（1285／一九四一⑦／二一五）

■27　匂宮の悲嘆に沈む様子を聞いた薫は、浮舟と匂宮の関係を確信する
「かの宮～」　（1370／一九四二②／二一六）
［８］匂宮は悲嘆から病となり薫は浮舟の死によるものと知る
■28　人々が日々匂宮を見舞う中、薫も式部卿宮の喪に服した姿で訪れる

「宮の御とぶらひに～」　（1459／一九四二⑪／二一七）

■29　匂宮は薫と対面し涙が落ちるが、浮舟ゆえとは気づかれまいと思う
「人々まかでて～」　（1501／一九四三②／二一八）

■30　匂宮は薫の冷静さを薄情だと思うが、薫こそ浮舟の形見だとも思う
「さりや、ただ～」　（1578／一九四三⑩／二一八）

■31　薫は匂宮に浮舟の死を語り、流れ落ちる涙を抑えることができない
「やうやう世の物語〜」　　（1646／一九四四④／二一九）
［９］薫は大君の縁者だった浮舟の死を語り匂宮との関係をあてこする

■32　匂宮は薫の取り乱した様子に動揺するも、何気ないふうをよそおう
「気色のいささか〜」　　（1776／一九四五④／二二一）

■33　薫は匂宮に浮舟との関係を少しずつ当てつけながら話し、退出する
「さる方にても〜」　　（1806／一九四五⑦／二二一）

■34　薫は匂宮の浮舟に対する思いの深さを知って、悲しみを新たにする
「いみじくも思したりつるかな〜」　　（1839／一九四五⑪／二二一）
［10］匂宮が病気になるほどの浮舟を思い葬送の簡略さを気にする

■35　浮舟の死や葬儀のことなど、薫には腑に落ちない点が多く思案する
「後のしたためなども、〜」　　（1918／一九四六⑥／二二二）

■36　浮舟が生きていれば京に迎えた日、薫は浮舟を思い匂宮へ歌を贈る
「月たちて〜」　　（1956／一九四六⑪／二二三）
［11］薫が浮舟を引き取る日に匂宮へ歌をやり匂宮は中君に打ち明ける

■37　これまでの経緯を知る中の君に、匂宮は浮舟との関係を打ち明ける
「女君、このことの〜」　　（2026／一九四七⑥／二二四）

■38　匂宮は右近を迎えるため宇治へ使者、浮舟亡き後の宇治の邸の様子
「いと夢のやうにのみ〜」　　（2091／一九四七⑬／二二四）
［12］浮舟の死を偲び匂宮は時方を宇治へ遣わし侍従を連れ出す

■39　使者と対面した右近は泣きくずれ、喪が明けてから上京すると話す
「右近あひて〜」　　（2169／一九四八⑧／二二五）

■40　共に泣く時方、右近らへの気持ちが深いものとなった胸の内を語る
「大夫も泣きて〜」　　（2218／一九四九①／二二六）

■41　右近は侍従に上京を勧め、侍従は匂宮の姿見たさに上京を決心する
「わざと御車など〜」　　（2258／一九四九⑥／二二六）

■42　支度をした侍従は、浮舟が生きていれば通った道を泣きながら上京
「黒き衣ども着て〜」　　（2328／一九四九⑬／二二七）

■43　匂宮は侍従に浮舟の死直前の様子を詳しく尋ね、一晩中語り明かす
「宮は、この人〜」　　（2357／一九五〇③／二二七）
13］匂宮は侍従から浮舟の様子を聞き右近と贈り物を見て悲しむ

■44　匂宮は侍従に親しみを感じ、匂宮に仕えるよう勧めて別れを惜しむ
「何ばかりのものとも～」　（2456／一九五〇⑭／二二八）

■45　匂宮は侍従に、浮舟のために用意していた櫛や衣装を持たせて帰す
「暁に帰るに～」　（2486／一九五一④／二二九）

■46　宇治に帰った侍従は、匂宮からの贈り物を右近と見ては泣いて嘆く
「右近と二人～」　（2527／一九五一⑧／二二九）

■47　薫は宇治に到着、道すがら八の宮から始まった宇治との因縁を思う
「大将殿も～」　（2546／一九五一⑪／二三〇）
［14］薫は不審な思いで宇治を訪れ右近から入水の真相を聞く

■48　薫に浮舟の死について尋ねられた右近は、身投げしたことを明かす
「右近召し出でて～」　（2585／一九五二②／二三〇）

■49　薫は浮舟が身投げしたとは信じられず、右近に詳しく話すよう促す
「あさましう～」　（2646／一九五二⑨／二三一）

■50　右近は、薫からの手紙がないことを浮舟が悲観していた様子を話す
「おのづから～」　（2728／一九五三⑤／二三二）

■51　薫は浮舟の浮気心を言い立てて、匂宮との関係を右近に問い詰める
「我は心に～」　（2865／一九五四⑧／二三三）
［15］薫は浮舟と匂宮との関わりを難詰し右近は消息を認める

■52　浮舟と匂宮は手紙のやりとりをしただけの関係と、右近は嘘をつく
「たしかにこそは～」　（2932／一九五五①／二三四）

■53　薫は浮舟を宇治に住まわせたことを後悔、宇治の地を疎ましく思う
「かうぞ言はむかし～」　（3016／一九五五⑪／二三五）

■54　薫は自分の手落ちから浮舟の死を招いたことを悔やみ、母君に同情
「宮の上の～」　（3088／一九五六④／二三六）
［16］薫は浮舟を人形と称した不吉さを思い法要を依頼して帰京

■55　薫は木の下の苔に座り、宇治の地との辛い関わりを思って詠歌する
「穢らひといふことは～」　（3138／一九五六⑩／二三六）

■56　薫は宇治山の阿闍梨に浮舟の法要を行うよう細やかに指示し、上京
「阿闍梨、今は～」　（3181／一九五七①／二三七）

■57　穢れを避けての旅住まいに呆然とする母君、薫の使者の来訪を喜ぶ
「かの母君は～」　（3261／一九五七⑪／二三八）
［17］薫は母君を弔問して子どもたちの後見を約束する

■58　薫は大蔵大輔を遣わし弔問、悔やみの言葉と共に遺族の世話を約束
「あさましきことは～」　　（3302／一九五八①／二三八）

■59　薫の心遣いに感激した母君は、涙ながらに返事をし帯や太刀を贈る
「いたくしも～」　　（3381／一九五八⑩／二三九）

■60　母君からの返事と、遺族と親戚づきあいをすることになる薫の本心
「殿に御覧ぜさすれば～」　　（3481／一九五九⑧／二四〇）

■61　事情を知らない常陸守に、母君は浮舟のこれまでのいきさつを語る
「かしこには～」　　（3573／一九六〇⑤／二四二）
［18］三条小家に来た常陸介が立腹し薫の文を見て浮舟の死を悲しむ

■62　常陸守は薫の手紙を見て感激し、浮舟の幸運な人生を惜しんで泣く
「大将殿の御文も～」　　（3600／一九六〇⑨／二四二）

■63　薫は浮舟の四十九日の法要を営み、右近に匂宮から供養の品が届く
「四十九日のわざなど～」　　（3665／一九六一③／二四三）
［19］四十九日の法要で匂宮も密かに布施し薫は尽きぬ悲しみ

■64　薫に手厚く法要を営む女性がいたことを知り、帝をはじめ驚く人々
「あやしく。～」　　（3718／一九六一⑨／二四三）

■65　悲しみが紛れるかと匂宮は他の女性に懸想、薫は浮舟を思い続ける
「二人の人の御心の中～」　　（3797／一九六二④／二四四）

■66　女一の宮の住まいを慰め所とする匂宮、小宰相の君に好意を寄せる
「后の宮の～」　　（3828／一九六二⑧／二四五）
［20］中宮の女房小宰相は匂宮に心は靡かず薫への悔やみの歌

■67　小宰相の君は悲嘆に暮れる薫の心中を思いやる歌を送り、薫も返歌
「かくもの思したるも～」　　（3912／一九六三③／二四五）

■68　薫は、浮舟よりも奥ゆかしさの身に備わった小宰相の君に感心する
「いと恥づかしげに～」　　（3957／一九六三⑨／二四六）

■69　蓮の花の盛りの頃、六条院で明石の中宮による法華八講が催される
「蓮の花の盛りに～」　　（4008／一九六四①／二四七）
［21］六条院で法華八講があり薫は氷で遊ぶ女一宮をかいま見る

■70　法会が終わり小宰相の君を探す薫は、几帳の間から中をのぞき見る
「五日といふ～」　　（4034／一九六四④／二四七）

■71　薫は、白い薄絹の着物姿で氷を持ち微笑む女一の宮の美しさに感動
「氷を物の蓋に～」　（4126／一九六四⑭／二四八）

■72　薫は女房達の中に、一際心遣いの感じられる小宰相の君を見つける
「御前なる人は～」　（4183／一九六五⑦／二四九）

■73　氷を割って遊ぶ女房達、雫を嫌がる女一の宮の声を聞き感動する薫
「心づよく割りて～」　（4221／一九六五⑪／二四九）

■74　女一の宮を見守る薫、慌てて入ってきた女房に姿を見られ立ち去る
「まだいと小さく～」　（4262／一九六五⑭／二四九）

■75　女房は襖を開け放しにしたことを反省し、薫は女一の宮を見て後悔
「このおもとは～」　（4330／一九六六⑨／二五〇）
［22］薫は女一宮を見たことを後悔し女二宮に薄物の単衣を着せる

■76　翌朝女一の宮の姿を思い返す薫、女二の宮に薄物の単衣を仕立てる
「つとめて～」　（4392／一九六七③／二五一）

■77　薫は女二の宮に薄物の単衣を着せて氷を与え、女一の宮と比較する
「例の、念誦したまふ～」　（4450／一九六七⑩／二五二）
［23］女二宮に薄物の単衣を着せ氷も持たせ女一宮との文通を求める

■78　薫は女二の宮の降嫁以降、女一の宮から便りがないことを聞き嘆く
「一品の宮に～」　（4531／一九六八⑤／二五三）

■79　翌朝薫は明石の中宮を訪ね、匂宮に似た美しい女一の宮を思慕する
「その日は暮らして～」　（4573／一九六八⑩／二五三）
［24］薫は中宮のもとに参上し女一宮から女二宮への文を求める

■80　薫は明石の中宮に、女一の宮から女二の宮へ便りを出すよう求める
「大将も近く～」　（4636／一九六九②／二五四）

■81　小宰相の君を訪ね薫は西の渡殿の方へ、女房達と世間話をして長居
「立ち出でて～」　（4745／一九六九⑭／二五五）
［25］薫は中宮の女房と語り中宮は薫と小宰相との親密さを聞く

■82　明石の中宮は大納言の君から、薫と小宰相の君の親密な間柄を聞く
「姫宮は～」　（4837／一九七〇⑩／二五六）

■83　大納言の君、浮舟が匂宮と薫との板挟みで入水したという噂を語る
「いとあやしきことを～」　（4929／一九七一⑥／二五七）
［26］大納言は中宮に浮舟入水と匂宮の軽率さが世の非難にと語る

■84　明石の中宮は驚愕し、下童に口止めするよう指示して匂宮を気遣う
「宮も、いとあさましと～」　（4995／一九七一⑭／二五八）

■85　女一の宮から女二の宮へ便り、喜ぶ薫は女一の宮に物語の絵を贈る
「その後、姫宮の～」　（5086／一九七二⑩／二五九）
［27］女一宮から女二宮へ消息と絵あり薫は大君と浮舟の死を悔やむ

■86　薫は大君が生きていたならと恨めしく思い、また中の君を思い後悔
「かくよろづに～」　（5153／一九七三⑤／二六〇）

■87　薫は浮舟の死を恨むも、すべては俗世になじまぬゆえと己を責める
「これに思ひわびて～」　（5197／一九七三⑩／二六〇）

■88　匂宮は浮舟を失った悲しみを紛らわすため、再び侍従を呼び寄せる
「心のどかに～」　（5254／一九七四③／二六一）
［28］匂宮は侍従を中宮の女房とし浮舟のすばらしさを回顧

■89　既に上京していた侍従、匂宮より明石の中宮に出仕することを希望
「皆人どもは行き散りて～」　（5301／一九七四⑨／二六一）

■90　侍従は明石の中宮に出仕し、浮舟のように美しい人はいないと思う
「心細くよるべなきも～」　（5366／一九七五②／二六二）

■91　式部卿宮亡き後、明石の中宮のはからいで宮の君は女一の宮に出仕
「この春亡せたまひぬる～」　（5407／一九七五⑦／二六三）
［29］式部卿宮の没後に中宮はその姫君を宮の君として女房にする

■92　匂宮は宮の君に懸想し、薫は女房の身分に落ちた宮の君に同情する
「兵部卿宮～」　（5477／一九七六①／二六三）

■93　明石の中宮を世話する夕霧は繁栄を極め、匂宮は宮の君を懸想する
「この院に～」　（5530／一九七六⑦／二六四）

■94　六条院の秋、匂宮は女房達と風流事に興じるも薫は深く立ち入らず
「涼しくなりぬとて～」　（5595／一九七六⑭／二六五）
［30］侍従は匂宮と薫をかいま見し浮舟の幸せな宿世を思う

■95　侍従は匂宮と薫を物陰からのぞき見ては、亡き浮舟を恨めしく思う
「例の、二ところ～」　（5650／一九七七⑥／二六五）

■96　薫は東の渡殿に立ち寄り、女房達に声を掛けると弁のおもとが応対
「東の渡殿に～」　（5706／一九七七⑫／二六六）
［31］薫は中宮女房を訪れて弁のおもとと話し歌を詠み交わす

■97　薫は女房に戯れに歌を書いて詠みかけ、女房は風情ある手跡で返歌
「かたへは几帳の～」　　（5793／一九七八⑨／二六七）

■98　弁のおもとは生真面目な薫の歌を批難し返歌、薫も返歌して戯れる
「弁のおもとは～」　　（5860／一九七九③／二六八）

■99　薫は女房と匂宮の会話を聞き、女房達と匂宮の打ち解けた仲に嫉妬
「東の高欄に～」　　（5932／一九七九⑫／二六九）
［32］薫は中宮方の女房と親密になり匂宮を悔しがらせたいと思う

■100　薫は匂宮との辛い関わりを歎き、中の君の好意的な態度に感心する
「下り立ちてあながちなる～」　　（6000／一九八〇⑤／二七〇）

■101　薫は西の渡殿を訪れ、くつろいで箏の琴を弾く女房達に声をかける
「例の、西の渡殿を～」　　（6081／一九八一①／二七一）
［33］薫は女一宮の女房と話し以前かいま見した姫宮のことを思う

■102　薫は中将のおもとに女一の宮の事を尋ね、差し出された和琴を弾く
「まろこそ御母方～」　　（6130／一九八一⑦／二七一）

■103　薫は己の優れた宿命を思い、女一の宮を妻にできたらと高望みする
「律の調べは～」　　（6171／一九八一⑬／二七二）

■104　若い女房達が月を鑑賞する中、宮の君に同情する薫は部屋を訪れる
「宮の君は～」　　（6224／一九八二⑤／二七三）
［34］薫は宮の君の不幸な運命に同情し匂宮が心を乱す女性かとも思う

■105　薫は女房に宮の君への取り次ぎを頼むも、女房は取り次ぎせず応対
「南面の隅の間に～」　　（6266／一九八二⑨／二七三）

■106　薫にたしなめられ驚く女房、促されるまま宮の君は薫に話しかける
「並々の人めきて～」　　（6315／一九八三①／二七四）

■107　薫は宮の君の声を聞き将来が気遣われ、匂宮の心を乱す人かと思う
「ただ、なべての～」　　（6359／一九八三⑦／二七四）

■108　宇治の姫君達を思い続ける薫、夕暮れに飛び交う蜻蛉を眺めて詠歌
「これこそは～」　　（6392／一九八三⑪／二七五）
［35］宮の君に比べ大君と中君の難点のなさから浮舟の運命を悲しむ

「鷺水庵より」にて、2018 年 02 月 17 日公開データ
2018 年 03 月 24 日、まとめ